若山牧水日記に見る読書記録（三）

吉　岡　義　信

はじめに

本誌第１１号に早稲田大学入学の明治３７年（1904）の読書記録について書いておいたが、その後の日記は明治４５年（1912）、大正１１年（1922）、同１２年（1923）、同１４年（1925）から昭和３年（1928）の４月までで、しかも断片的であり、その中で読書に関するものは下記のように僅かな記録しか残っていない。なお、牧水は昭和３年の９月１７日に亡くなっている。

明治45年

６月２９日　郡山君が、「悲しき玩具」を持つてきた。あまりにおそまつな製本なので、いやな気がした。拾い読みに読む。佳いと思ふのはあるが、どうも矢つ張り枯れすぎてゐる。皮一重のへだゝりがある。この、現在の自分の心などゝは、どうしても相容れぬ、作品を疑う心がまた新たにならうとする。

石川啄木は、この年の４月１３日に死去しており、牧水は臨終に遭っている。この臨終の時の様子は、牧水の『石川啄木の臨終』（大正１２年作）に詳しいが、この中で「私から土岐哀果君に頼み、同君から東雲堂に持込んだ彼の歌集の原稿料が昨日届いたといふお礼を何より先に言った。」とある。この文章の最後の方に、啄木が亡くなる前々日見舞った際に薬を買う金もなく、しかもどこからも入ってくる見込みも無いと告げられた牧水は、すぐに薬屋に行ったが財布にある金では買うことができず、本郷まで金を借りに行ったが出来ず、「その足で、同じくその日彼から頼まれた歌集（『悲しき玩具』であったろう）原稿を売るために土岐君を芝に訪ねた。土岐君はすぐ日本橋の東雲堂に行き、それを二十円に代へて石川君の許に届けたのであった。」とある。なお、同歌集は６月２０日に発行されている。

７月１日　６月２９日追記、金を一円二三十銭持ってゐた、飲まうか、飲みたくない、食はうか、食ひたくない、寄席へでも行かうか、行きたくない。とゞのつまり、ひよいと何か面白い本でも買はうかと思つて、思はず苦笑した。本を買はうなどと思ひ立つたことは、殆ど何年ぶりの現象だらう。

この前段部分に夜、下渋谷の友人を訪ねたが留守のため、青山六丁目で電車を降り、新宿まで歩いたとある。またこの後には、青山の練兵場に入り、鹽町二丁目あたりで桜実を買い、食べ歩きながら新宿二丁目の一品料理屋に入り、食いたくないものを食い、飲みたくもない麦酒を飲んで、酔って帰ったとあるので、結局、本は買わなかったようである。

大正１５年

３月２０日　有朋堂文庫を一時払にて註文す

有朋堂文庫は、明治末期から単行本としてぽつぽつ出していたものを、大正２年（1913）

の秋に第一次予約募集を開始、一大叢書として刊行し、４年半かけて全１２１冊で完結している。

昭和２年

１月２５日　寝ながらアルス美術叢書の二三を読む

牧水はこの数日前から風邪のため、発熱し医師の来診を受けている。アルス美術叢書は、国立国会図書館の OPAC によると、出版社のアルスより大正１４年から昭和２年にかけて全２６編が刊行されている。

１月２６日　終日就床、読書と生活改善に就いてあれこれ考ふ

１月２７日　やゝよし、読書と思索

昭和３年

２月　２日　風邪また悪く、就床終日、「大菩薩峠」を読む

『大菩薩峠』は、中里介山（1885-1944）の代表作であり、大正２年（1913）９月１２日から翌３年２月９日まで「都新聞」に連載されたのを皮切りに、昭和１６年まで断続して未完に終わっている。単行本では、大正７年（1918）に玉流堂から自家出版され、以後、玉流堂書店、春秋社などから出版されている。春秋社のものは、大正１０年（1921）から出版されており、特装版、普及版などもある。

２月１４日　「潮みどり集」を読む

潮みどり（1897 － 1927）は、長野県生まれの歌人。牧水の妻喜志子の妹で、義兄である牧水に師事し「創作」に作品を発表、前年の昭和２年１０月に死去。『潮みどり歌集』は、同年１１月にぬはり社から出版されている。柔軟で純一な感傷的叙情によって貫かれた秀れたものとある。

参考文献

『日本近代文学大事典』（日本近代文学館編　講談社　1984）
『近代文学研究叢書』第５３巻（昭和女子大学近代文学研究室著　昭和女子大学近代文化研究所　1982）中里介山
『日本出版文化史』（岡野他家夫著　原書房　1981）
『日本の出版界を築いた人びと』（鈴木省三著　柏書房　1985）

（よしおか・よしのぶ　別府大学附属図書館）